



## 近世長岡の物産

市域の村々は、時として旱魃や洪水に苦しめられることがあったものの、その多くが農間余業に携わることのできる豊かな農村地帯でした。江戸時代半ば以降、寒天や菜種、竹の子など、それぞれの村ごとに様々な物産が作られます。

市域の村々における近世の物産のようすを、市域に残された関係資料などをもとに紹介いたします。



展示期間 平成 17 年 4 月 2 日(土)～6 月 30 日(木)



### 明治初年村別物産分布図

下の図は、『乙訓郡村誌』(京都府庁文書)に記載されている、各村の物産を、明治 42(1909)年の地形図(『資料編三』付図)に示したものです。『乙訓郡村誌』は明治 10(1877)年ごろに行われた、京都府の地誌編纂事業のもと作成されたもので、幕末から明治初年の各村のようすをうかがい知ることができます。



※1 ( ) 内の数字は人口

※2 村界は『民俗編』付図 2 をもとに一部調整。

※3 近世の古市村は明治 9 年に神足村と合併し、神足村となりました。

※4 『乙訓郡村誌』に茶の生産は明治 4 年から始まったとされています。

※5 上記以外に勝竜寺村では籾・小豆・大根・牛蒡・蕨、調子村では蚕豆、馬場では大豆・蚕豆、友岡村では煙草・芋が生産されています。



### 開田の寒天場

寒天は、テングサを煮熟し、ろ過した液を天然の寒気で凝固させた後、日光にあてて乾燥させたもので、冬場に水清く空気が澄んでいて風のない地でしか作れないといわれています。天保 15(1844)年、開田村では長岡天満宮境内で寒天生産の試みがなされ、年代はわかりませんが、奥海印寺の西代橋近くにも寒天場があったと地元の方に語り継がれています。

## 竹と竹の子

乙訓の名産といえば、一番に思い浮かぶのは竹と竹の子ではないでしょうか。竹は、竹籠をはじめとした日用品の材料であると同時に重要な建築資材として売買されていました。市域にも調子・古市・開田・井ノ内に竹屋があり、村々から竹を買い取り京都へ売りさばっていました。

また、孟宗竹の栽培が乙訓地域で盛んになるのは天保年間のことです。当時、孟宗竹は大流行し、田を耕すより高利となったため、人々はきそって山林を開き、藪地を造成していきました。

大坂青物市場の間屋仲間から西岡村々に竹の子の出荷を増やすよう依頼しています。幕末には乙訓の竹の子の名が京都や大坂にまで行きわたっていたことがうかがわれます。



安政 6 (1859) 年、筍出荷依頼状(開田区有文書)

## 奥海印寺の瓦

すべての住宅が瓦をのせることのできない近世社会にあって、京都の瓦職人は「御用瓦師」とよばれ、株仲間を結成して、二条城の修復や御所内の御用、仕事場の分担や瓦葺師の雇用などを取り決め、営業の独占をはかっていた。御用瓦師仲間の一人、奥海印寺村の儀兵衛は、寛政 3 (1791) 年の大風で被害のあった土蔵の瓦の修繕に上里村まで出向いています。

弘化 3 (1846) 年、瓦師株を取得した奥海印寺村の長兵衛は、太鼓山の七ツ池の傍らに瓦の仕事場を新たに作り、新たに作り、「百姓透間に瓦焼」の営業を始めています。

## 浄土谷の松茸と楊梅

山間部に位置する浄土谷村は、稲作には適さない地域でしたが、<sup>やまもも</sup>楊梅と松茸を特産としていました。毎年、領主である仙洞御所(上皇)などへ献上するかわりに夫役が免除されていました。

右の絵図には、楊谷寺の境内や乗願寺の裏の山など、浄土谷村内の所々に楊梅の絵が記されています。



年未詳、城州乙訓郡浄土谷村領内絵図、部分(浄土谷村文書)